

2008年9月29日日本テレビ 定例記者会見**《 全文 》****< 発表 >**

久保伸太郎社長：

冒頭に三点発表することがあります。まず始めに「アースマラソン」について説明します。「24 時間テレビ」でマラソンを走った間寛平さんが2年をかけて地球を一周するという計画です。吉本興業と電通、日本テレビ、3社の出資による「間寛平アースマラソン製作委員会」を10月に設立します。間さんは12月17日に大阪をスタートし、主として「人力」と「風力」によって世界を一周します。これをさまざまな伝送経路、さまざまな番組等々でお伝えするという企画です。

私どもとして訴えたいのは、「間寛平という人のヒューマンドラマ」、「世界の今を記録するドキュメンタリー」、「2年間に及ぶ世界最長のスポーツ番組」、「人力と風力のみで世界一周を目指す究極のエコロジー番組」などの特徴を持つこの企画を、日々の映像と共に伝えることです。

続いては、11月に放送するドラマで、55年企画「the 波乗りレストラン」です。これは、NTTドコモと共に設立したLLP（有限責任事業組合）D.N. ドリームパートナーズとアミューズソフトエンタテインメント、日本テレビで出資して、「サザンオールスターズ」の名曲33曲でつなぐショートドラマを展開するものです。NTTドコモとのLLPでは、これまで様々なことを展開してきましたが、これによってまた新しい展開を期待しています。特にこのドラマは「宝探し」のようなところがあって、放送時間がアトランダムに配置されています。

色々な試みが詰まっていますが、これも成功させたいと思っています。

三つ目は、萩本欽一さんが司会を務める人気長寿番組の「全日本仮装大賞」ですが、イタリアの大手民放テレビ局「Canale 5」で放送が始まりました。既に私どもと提携しているフランスの民放テレビ局 TF1でも放送され、大変高い評価をいただいておりますが、海外に対する番組・フォーマット販売は、これからも私どもとして力を入れていきたいということでご紹介しました。

1. 上半期視聴率の動向分析。10月改編のポイント

記者：まず、上半期の視聴率の動向と10月改編のポイントをお願いします。

久保社長：視聴率トップを目指すことは、私どもの年間の会社目標、また中期経営計画の目標にしています。多少のこぼこ、滑った転んだ、あるいは多少時間がかかっているかもしれませんが、着実に改善の方向に向かっていると言えます。

「上半期」、「月間」等の前年同期との視聴率比較の詳細については、室川取締役からご説明します。私どもとしては、やはり「トップ奪還」を目標に掲げていますので、常々申し上げているのは、「2位までたどり着いた」、あるいは「一部は1位、2位」の、「もうこれであまり無理しなくてもいいじゃないか」といった、「心地よい2位」に甘んじては駄目だということです。これを繰り返し編成・制作等の現場には伝えていきます。

「何としてでもトップ奪還を目指す！奪還する！」という勢いで取り組んでいます。数字にそれは着実に出てきています。しかし、時間がかかるのが許されないような競争環境になっていると思いますので、引き続き最大限の努力をしていきたいと思っています。

室川治久取締役：上半期の視聴率については、順調に伸びており、全日で8%、プライム 12.0%、ゴールデン 12.0%、ノンプライム 6.9%です。全日が0.1%ほどダウンしていますが、ゴールデン、プライムについては、0.3%から0.4%アップしています。各局はほとんど、このGP帯は、昨年より下げています。日本テレビだけが上げているという状況で、その相対比較でも非常に強い状態になっているということです。

今は2位ですが、この秋の改編で1位を目指します。「日テレ55」を合言葉に開局55年キャンペーンを展開していますが、10月期の改編のキャッチコピーは、「日テレ55・第2章」。特に平日の弱いGP帯、例えば視聴率が1ケタ台の枠などを最重要課題として編成しました。これは日テレだけではなく、よみうりテレビなど系列局も含めてのことです。

今年は「開局55年」ということで、これまでも多数の大型特番を放送してきましたが、下半期においても数々の「55年企画」をやるつもりです。ちなみに、「55年企画」の「中間総括」ですが、1月に放送した「報道プロジェクトアクション」は視聴率12.5%、2月の「東京マラソン」は20.6%、4月期の「ごくせん」は26.4%、「行列のできる法律相談所スペシャル 100枚の絵でつなぐカンボジア学校建設計画」は、新しいチャリティーの形として放送しましたが、5月11日の放送で26.4%という好成績を残しております。また、8月1日に阿久悠さんの特番を放送しましたが、これも15.9%という非常に高い、狙った通りの形で結果が出たかなと感じています。

また映画でも、「L change the WorLd」や、「崖の上のポニョ」、「20世紀少年」など、非常に高い評価を得ています。

最近の視聴率ですが、全日、ノンプライムが非常に良くなってきています。朝帯はこれまでも良かったのですが、ここへきて、午後帯もまとまってきて、全日、ノンプライムは2か月連続の1位を取っています。この2か月、十分な成果が出ていると思います。この状態は今後下期においても続いていく見通しで、継続して戦っていけると考えています。

10月改編では、視聴率1ケタ台を無くすことが目標ですが、10月20日から放送が始まるのが、月曜22時の「しゃべくり007」です。これまで土曜17時半から放送していたバラエティ番組で、大変高い視聴率を取っておりました。人気、実力を兼ね備えたネプチューン、くりいむしちゅー、チュートリアルの3

組の芸人が繰り広げるトークバラエティです。

それから、火曜 21 時の枠は、10 月 7 日から「誰も知らない泣ける歌」を開始します。世の中にたくさんある歌の中で、メジャーではないが「聞くと泣けてしまう」とか、「歌の背景に、そうだったのかという秘められたエピソードのある」名曲を取り上げ、VTRと本人の生出演で紹介する新しいタイプの音楽バラエティです。出演者は西田敏行さんとくりいむしちゅーの上田晋也さんです。この「誰も知らない泣ける歌」は、「行列のできる法律相談所」や、「人生が変わる 1 分間の深イイ話」など、非常に素晴らしい作品をつくっている当社のいわゆるエースディレクターを起用し、内容ともに充実させて、高視聴率を狙います。

次にドラマです。火曜ドラマは 10 月 14 日スタートの「オー！マイ・ガール！！」で、速水もこみちさんが主演で、貧乏独身男性と 6 歳の売れっ子子役の奇妙な同居生活をハートフルに描きます。

水曜ドラマは「OLにつぼん」です。10 月 8 日から放送開始で、「斉藤さん」の観月ありささん、阿部サダヲさんを起用、脚本は「ハケンの品格」の中園ミホさんです。今回は、いわゆる人材の「アウトソーシング」で、中国人の研修生と日本人OLのありようをテーマにしています。水曜ドラマは、女性の生き方シリーズが続いていますが、その路線に沿った形でのドラマです。

土曜ドラマは、これまで「ごくせん」、「ヤスコとケンジ」など好評を頂いている、いわゆる家族で楽しめる路線です。今回は、「スクラップ・ティーチャー～教師再生～」というドラマです。生徒が教師をどう再生するかという逆転の発想でドラマをつくります。Hey! Say! JUMPの4人組と加藤あいさんらが出演し、脚本は水橋文美江さんです。得意の学園もので今回も学校、教師のありようを描きます。

BCタイムは、9 月から始まった「情報ライブ ミヤネ屋」が、このまま継続します。非常に好評で、徐々に視聴率も上げています。前の番組と比べて、少なくとも 1%以上上げていて、この番組が午後帯をまとめる原動力にもなっています。

また、日曜午前帯を大きく改編します。これまで 8 時～10 時に放送してきた「THE・サンデー」を、8 時～9 時半の「The サンデー NEXT」にします。枠を若干コンパクトにしまして、今までどおり徳光和夫さんが司会です。1 週間の出来事を、お年寄りから若い方までが十分わかる、今の視聴者に合ったニュースという形で進めていきます。

それからこれまで親しまれてきた「いつみても波瀾万丈」を「誰だって波瀾爆笑」に変えます。司会を福留功男さんから元NHKの看板アナウンサー堀尾正明さんにします。まわりの出演者も関根麻里さん、溝端淳平さんと、若い方も十分に楽しめるバラエティにします。もちろんこれまでのテイストはきちんと保ちますので、これまで見ていただいていた方にも十分満足いただける内容です。

一方、土日のスポーツニュース、「スポーツうるぐす」にも堀尾さんを起用します。江川さんの良さをもっと出そうじゃないかというものです。つまり、江川さんが、ピッチャー型のトークで投げるのなら、いいキャッチャーを持って

来ようじゃないかということです。これまでの経歴から堀尾さんは絶好のキャッチャーであり、江川・堀尾のバッテリーで「江川×堀尾のSUPERうるぐす」としてパワーアップします。

以上が10月改編のポイントです。この辺がまとまってくると、GP帯は10月以降相当戦える体制になると考えています。

記者：9月の月間視聴、年度上半期の視聴率では、ゴールデン帯でNHKが1位になりましたが、その原因はどう分析していますか？

久保社長：ゴールデンタイムは19時から22時までですね。そこでNHKが上半期トップになった背景には、19時台のニュースの需要が高まったことがあると思います。様々な出来事が起き、かつ人々の関心をひくニュースが多かったということです。それと何といたっても北京オリンピックの要素が非常に大きかったと思います。

19時のNHKニュースの視聴率は、日々チェックしていますが、ニュースへの関心が高まっているのはどういう社会的背景があるのか、私ども日本テレビとしてもきちんと分析をして、対応していかなければいけないと思っています。

2. プロ野球中継について

記者：これからの見通しも含めて、プロ野球中継について、どう思いますか。

久保社長：ペナントレース開幕から今まで、日本テレビが地上波で放送したナイターの平均視聴率は、まだ前年に及んでいませんが、9月単月では2ケタ台になりました。試合が面白ければ見てもらえるということです。色んな選手が連続して、あるいは日替わりのヒーローで登場して活躍したことや、巨人ファンが待ち望んでいるような試合展開になったからではないでしょうか。

記者：9月の視聴率が良かったのは、試合内容が非常に良かったからだということですが、つい先日、甲子園球場の巨人・阪神戦の地上波でのナイター中継がないという事態がありました。この先、日本テレビはどのような対応をとられますか？

久保社長：関西の甲子園球場の試合については、放送権を売りに出す会社の判断です。私どもは巨人軍主催ゲームについて購入してます。これはちょっと、どうにもならない話です。あらかじめ放送権は契約して決まっていることから。

記者：今後のプロ野球中継放送は、クライマックスシリーズなどありますが、今までと比べて違いはありますか。

久保社長：10月4日と5日、東京ドームで巨人・中日のデーゲームがあります。

これは地上波で放送します。もちろんG+でも放送します。

それから、10月8日は最後の巨人・阪神戦が東京ドームであります。10月9日は、東京ドームで巨人・横浜ベイスターズ戦があります。どちらもBS日テレで放送します。ただ、8日の試合に巨人軍の優勝がかかる、あるいはまだ優勝が決まっていない場合には、地上波でも放送することを内定して、様々な作業に入りました。これで巨人軍の優勝が決まる、勝てば胴上げということなら、最後まで放送します。

それから、まだ優勝は決まっていないけれど、巨人・阪神戦に最後の天王山の一步手前ということなら延長対応をするということで、地上波でも放送することを内定して作業に入りました。ただし、それまでにどちらかのチームの優勝が決まれば、当初の予定通りBS日テレで放送します。

クライマックスシリーズその他はまだ全くわかりません。

記者：10月8日は水曜日ですね。10月からの連続ドラマとぶつかりませんか？

久保社長：期末期首の特番を差し替えるんです。

記者：こういう放送の対応を採られたのは、昨年ジャイアンツが優勝した時に放送出来なくて、視聴者からの反響、問い合わせが相次いだことへの反省を活かしてということもあるんですか。

久保社長：全くないといえば、嘘になってしまいますが、それだけではありません。やはり、巨人・阪神戦という伝統の一戦がここまで盛り上がって、巨人・阪神の優勝争いというのは、30何年ぶり。そういうことも念頭にあります。

去年、特にプロ野球ファンというより巨人ファンの方から、地上波放送の対応等について様々なご意見、お叱り等々も頂戴しました。私どもとしては、衛星波のG+、BS日テレ、地上波の3波で様々な展開していくという観点に立つと、全く放送していないという気持ちはないんです。しかし、去年の段階では、BSの普及率も非常に低かったですから、今年はそれも念頭に置きつつ決めました。色々と検討を始めていますが、あくまでもまだ仮定の話です。

3. 営業状況と放送外収入の動向について

記者：営業状況と放送外収入の動向についてお尋ねします。

久保社長：営業状況は、非常に厳しい環境が続いています。タイムセールスは、単発セールスの成功、あるいは北京オリンピック等々あって、この厳しい経営環境の中では、相当善戦していると思っています。ただ残念ながら、視聴率の改善にも関わらず、スポット収入は前年に及んでいません。上半期のスポットを前年同期と比較すると、落ち込み幅はキー局の中でおそらく一番小さかったのではないかと思います。

記者：回復の兆しは見られますか？

久保社長：10月以降の見通しですが、ちょっとおやつというような兆しはありますが、それでぬか喜びをされている状況ではありません。引き続き厳しいという前提に立って経営に当たっていきたいと思っています。

記者：そろそろ前年の数字ぐらい良くなるのではないですか？

久保社長：月の上旬、中旬、下旬と、ちょっと景気が良くなるのかなと見えたり、1週間経つとまたパタッと止まってしまったりと、その繰り返しです。

記者：放送外収入についてはどう思いますか？

久保社長：主として映画ですね。映画は、期待の作品を4月以降投入していますので、これが貢献してくれることを強く望んでいますし、現時点でいい感触があるのかなと思っています。

島田洋一常務：映画は、ご承知のように、今、大きな作品が2つ公開されています。1つは、「崖の上のポニョ」、もう1つは、「20世紀少年・第1章」です。「崖の上のポニョ」は、7月19日から公開し、9月28日迄の72日間、宮崎駿監督のジブリ作品として、非常に満足出来る結果が出ています。

「20世紀少年」は8月30日から公開を始め、9月28日迄でちょうど30日間やっています。これも大変素晴らしい成績を収めていて、観客動員数、興行収入が「ALWAYS続・三丁目の夕日」とほぼ同じペースで伸びています。現在全国306館で上映されています。「ALWAYS続・三丁目の夕日」に匹敵するような成績を収めてくれると見ていますし、期待しています。

記者：今後の公開作品で何か注目作品等ありますか？

島田常務：年末に「252 生存者あり」、「K-20 怪人二十面相・伝」があります。「252 生存者あり」は、東京を史上最大の巨大台風が直撃し、災害に立ち向かう人々の姿を描くスペクタクル作品です。監督は日本テレビの社員である水田です。「K-20 怪人二十面相・伝」は、昭和24年の日本の架空の都市で、K-20こと怪人二十面相に仕立てられた男が、K-20と戦うエンターテインメント大作です。「ALWAYS 三丁目の夕日」の制作スタッフが新たな作品に挑戦します。来年1月末に公開するのが「20世紀少年・第2章」です。「20世紀少年」三部作の第2章で、海外での公開も既に決まっています。

4. アナログ停波に関する最近の状況、課題

記者：8月に地デジのキャンペーンをされていましたが、アナログ停波に関する状況や課題はどうなっていますか？

久保社長：8月は日本テレビの当番月間で、様々な番組で、「2011年、平成23年7月24日にご覧のアナログテレビ放送は停波し映らなくなります。デジタルテレビへの切り換えを」などといったキャンペーンを展開しました。キャンペーンに対して、視聴者サービスセンターへの問い合わせとして1万4,768件のお電話などを頂戴しました。大まかに分類すると、どうすれば受信できるのかというのが90%。購入したけれど映らないというような受信障害や混信の問い合わせが35%。切り換えたいんだけど、どこに頼めばいいのかといった工事先などの紹介を依頼する件数が45%だったそうです。前年より具体的な質問が増えてきたのが特徴でした。つまり、我々が最大限の努力をした結果、1万5,000件弱の皆様から様々なお問い合わせを受けたということです。

内容的にも非常に具体的な質問が増えてきたので、10月1日からNHKの部屋を借りて、受信者支援センターが東京にも設置されます。来年はさらに全国何ヶ所かに増設されるということです。これから具体的な相談等に応じていく体制を整えれば、2011年7月のアナログ停波は実現出来ると思っています。

5. NHKの有料配信についてどのように考えるか

記者：NHKが有料配信を始めることは、どのようにお考えですか。

久保社長：これはNHKと権利者団体とお話し合いになって、料率を決めて配信をするということになるのだらうと思いますが、私も民放も有料配信ビジネスを展開する上で、権利者団体との間で、様々な形で料率について話し合い、実現させているものもあります。交渉中のものはありますが、NHKとの交渉で決まった料率だけが一人歩きをして、NHKはこんな高い料金を払って実現したという形になることだけは、勘弁していただきたいと思います。

もちろん、NHKがお支払いになっている出演者、実演家、様々な関係者への謝礼、報酬、ギャラと、私も民放がお支払いしているものは、水準の違いがあるわけですから、単純に料率を比較して、NHKのほうが高いとなると、私もにとってもビジネスに支障が出るのではと心配しているということです。

記者：この件について、NHKとの話し合いは？

久保社長：日本テレビが単独でということは、現時点では想定していません。民放連を通じて様々な形で話し合うことになるのではないのでしょうか。

6. その他

記者：NHKの子会社が行う国際放送への出資について。

久保社長：日本として、国策としての国際放送、情報発信をどう展開するかということについては、様々な議論、提案、意見があるかと思います。ただ、今回のNHKを中心とした国際放送に関しては、率直なところ、NHKの福地会

長から熱心な働きかけがあり、私どもとして応分の出資をさせていただくということで、日本からの情報発信にささやかではありますが、協力させていただく決断をしました。

記者：フジテレビ、TBSが認定持株会社化することについて。

久保社長：何回かお答えしているかと思いますが、基本的に考え方は変わっておりません。経営の選択肢が増えた。認定持株会社を作ることが、われわれ免許事業の地上波放送事業者に可能になったということで、経営の選択肢が増えたということは歓迎していますが、日本テレビとしては、現時点では認定持株会社構想、それへの移行ということは考えておりません。

もちろん、フジテレビ、TBSが、この制度を活用してどのように経営体力を強化されていくのか、競争力を強化されていくのかということについては、重大な関心があります。

記者：一連の自民党の総裁選、民主党の党首選の報道姿勢も含め、日本テレビとしてのこの先の選挙体制について。

久保社長：選挙報道にあたっては、やはり単純明解、公平・公正な扱い、報道に努めるということに尽きると思います。有権者のみならず、国民の皆さまの関心が高まっていると受け止めておりますから、最大限努力をしていきたいと思っています。

記者：「ニュースリアルタイム」特集での大食い対決での不適切な報道について。そもそもニュース番組の中での、大食い対決のような企画の妥当性について。

久保社長：このことについては、冒頭に私のほうからご説明すべきでした。申し訳ありません。この件については、虚偽ではなく数え間違いであったという認識です。ご指摘のニュース番組の中でこのようなテーマを扱うということの是非については、このことはやはりきちんと問われなければいけないことだと思います。

あの後、私どもとしては、今後ニュース、あるいは報道番組の中でこの種の、大食い対決とか、大食いといったようなテーマを企画コーナーで扱うというようなことはやめるということを申し渡しました。

ただし、例えばニューヨークで行なわれる、ホットドッグの大食い競争などまでニュースとして取り上げないのかというと、これは1つのニュースとして、ニュースの優先順位と勘案しながら、娯楽、あるいは話題として取り上げることはあるかもしれません。

夕方の民放のニュース、各社を比較してご覧になればわかりのように、ほとんどが似たような企画コーナーというのが登場しています。その背景には、夜のゴールデン、プライムタイムにつなげていく上での夕方のニュースの視聴率の重要性があると感じています。一定の高い視聴率を取ると、後半の番組に

よい結果が出るというところから、様々なチャレンジが行われて、視聴率が取れるものは、既成事実化して、あれでもいいんだということになってきたのではないかと思います。

ニュースの中にも娯楽性を伴った項目も必要でしょう。硬派の新聞といえども、様々な娯楽的要素を含んだもの等々、芸能情報とか、スポーツなどは欠かせない要素として存在していますし、それ自体は否定できないとは思っています。しかし、これを機会に、やはりもう一度原点に立ち返って、報道の企画というのはどういうことなのか。取り組んでいきたいと思っています。

記者：ＢＰＯのバラエティ番組の倫理的な問題について検討しようという動きについて。

久保社長：行政や公的機関からの直接的な介入等については、できるだけ回避して、自律的に自浄作用で解決できる、解決する、解決すべきだという観点から、あのような第三者機関が設立されて、改組されてきた経緯があるわけですね。それは常に念頭に置いておかねばいけないというふうに思います。

ただし、同時に、表現の自由とか、制作、言論、報道の自由を確保していくことも、非常に重要です。

したがって、ＢＰＯの活動を、改組されてきた経緯を常に念頭に置きつつ、ＢＰＯといえども、ご指摘を受けたことについて、われわれがこれは納得できないということがあれば、反論すべきはきちんと反論していきたいというふうに思っています。